「十三　賃金を値上げし又はその値下げを阻止しようとする企ての主要な場合」（HP 在中）
「労働日を巡る労資対立の要点」（光文社文庫 p223）
（1）（p223）労働力の価値は、（労働者の）必需品の価値によって、即ち、それらを生産するのに必要な労働量によって規定される。ある国で、労働者の日々の平均的な必需品の価値が4 時間労働に相当し、それが 4000 円に表されるとすると、労働者は、この日々の生活資料と等価な価値を生産するのに毎日 4 時間労働をしなければならないだろう。
総労働日が 8 時間だとすると、資本家は労働者に 4000 円払うことで彼の労働の価値を支払うことになる。労働日の半分は不払労働であり、剰余価値率（m/v)）は 100 ％である。
ここで、生産性の低下の結果として、例えば同量の農産物生産により多くの労働が必要となり、日々の平均的な必需品の価格が 1000 円から 1500 円に上昇したとすれば、労働の価値は、50%上昇するだろう。今では労働日のうち必要労働が 6 時間必要になる。
それ故、剰余労働時間は、4 時間から 2 時間へ、剰余価値率は 100 ％から 50 ％へ下がるだろう。
ここで労働者が賃上げを主張したとしても、それは、他の商品の売り手が費用の増大に見合う価格を支払ってもらおうとするのと同じである。賃金がもし上がらなければ、あるいは、必需品の増大した価値を補填するほどには十分に上がらなければ、労働の価格は労働の価値よりも下がることになり、労働者の生活水準は悪化するだろう。
（日本の現状、即ち、物価上昇に追いつかない賃金上昇を勝ち取ったとしても、実質賃金の低下により労働者の生活が苦しくなるのと同様です！）
（2）（p226）必需品の価値、従ってまた、労働の価値は同じままでありながら、貨幣価値に変動が生じた場合、労働の貨幣価格に変化が生じる場合。
例えば、より豊富な金鉱の発見によって、２オンスの金が以前の１オンスの生産と同じ程度の労働しかかからない場合、金の価値は１／２だけ、即ち、５０％減価するだろう。
そうなれば他の全ての商品価値がかつての貨幣価格の２倍の価格で表されるので、同じ事は、労働の価値についても起こる。かつては、8000 円で表されていた 8 時間労働は、今では、16000 円に表されるだろう。もし労働者の賃金が 8000 円に上がるのではなくて 4000 円にとどまるなら、彼の労働の貨幣価格は労働の価値の半分にしかならないだろうし、彼の生活水準は恐ろしく悪化するだろう。この場合、労働の生産力にも、需要と供給にも、価値にも何の変化も生じていない。
これらの価値の貨幣名だけが変化しているのである。
こうした場合、労働者は比例的な賃上げを要求してはいけないなどと言うことは、労働者は、実質ではなく名目で支払われることで満足せよというようなものだろう。
過去の歴史が示しているように、こうした貨幣減価が生じたときにはいつでも、資本家はこの機会をめざとく捉えて労働者からだまし取ろうとする。（p227）
（3）（p227）我々はこれまで、労働日には一定の限界があるものと想定してきたが、労働日それ自体に何か不変の限界があるわけではない。しかし、資本の不断の傾向は、肉体的に可能な最大限度まで労働日を延長する事にある。なぜなら剰余労働（利潤）がそれだけ増大するからである。17 世紀には、また 18 世紀の最初の 2/3 においてさえ、10 時間労働日がイギリス全土での標準的な労働日であった。反ジャコバン戦争（1793 ～ 1815）の間、－この戦争は実際にはイギリスの貴族達がイギリスの労働者大衆に対して仕掛けた戦争だった－、資本はこの騒ぎに没頭し、労働日を 10 時間から 12 時間、14 時間、さらには 18 時間にまで延長した。

あのマルサスでさえ、このような事態が続くならば国民はその生命の源泉そのものにダメージを受けるだろうと警告したほどである。（地代論）
・（p229）労働者がその労働力を売るのは、それを維持する為であって、それを破壊する為ではない。労働者（人間）は機械とは異なり、仕事の単なる数字的加算によって見られるよりもはるかに大きな比率で衰亡する。例えば、1000 万円の価値のある機械を取り上げれば、もしそれが 10 年で使い果たされるとしたら、それを使って生産される商品の価値に年に 100 万円（の減価償却費）を付加するであろう。即ち、その年々の損耗分の価値は、機械が消費される年数に反比例する。
しかし、まさにこの点において労働者は機械とは異なるのである。･･･人間は、労働の単なる数字上の追加から想定されるよりも大きな度合いで衰えるのである。
・労働者は、労働日を以前の合理的範囲にまで短縮しようとすることで、あるいは標準労働日を法定できない場合に賃上げー強いられた超過時間に単に比例するだけではなく、より大きな割合での賃上げーによって過度労働を阻止しようとすることで、単に自分自身と労働者種族に対する義務を果たしているに過ぎないのである。
・（p230）彼等は単に資本による専制的略奪に制限を課しているだけである。時間は人間の発達の場である。いかなる自由な時間も持たない人間、睡眠や食事などによる単なる生理的な中断は別として、その全生涯を資本家の為の労働によって奪われる人間は、牛馬よりも哀れなものである。彼は、単に他人の富を生産するための機械にすぎないのであり、体は壊され、心は荒れ果てる。だが、近代産業の全歴史の示すところでは、資本は、もし阻止されなければ、全労働者階級をこの極度な頽廃状態に陥れる為に遮二無二の働きをするであろう。
・労働日を延長することで、資本家は以前より高い賃金を支払いつつ、それでもなお労働の価値を以前より低くしているかもしれない。賃上げが、搾取労働量の増大とそれから生じる労働力のより急速な衰退に照応していない場合にはそうなる。
（労働日の延長）
こうしたことは、別のやり方でも生じる。例えば、ランカシャにおける工場労働者の家族の平均賃金は上がったと。だが彼らが看過しているのは、その家族の長たる 1 人の成人男性の代わりに、今では彼の妻とおそらく 3，4 人の子供が資本というジャガナートの車輪の下に投げ込まれており、総賃金の上昇がこの家族から搾り取られる総剰余労働におよそ見合っていないことである。（女性・子供の労働投下）
現在、工場法が適用されている全ての産業部門では労働日の一定の制限が存在しているのだが、その場合でさえ、これまでの水準の労働の価値を維持するためだけであっても、賃上げが必要になるかもしれない。というのも、労働の強度を増大させる事によって、以前は 2 時間で支出したのと同じだけの生命力を 1 時間で支出させることができるからである。
（機械のスピード UP や受け持ち作業機の増加などで）（労働の強度）
労働強度の増大に見合った賃上げ闘争を闘うことによって、労働者は資本のこうした傾向を阻止しようとしているのであり、自己の労働の減価と労働者種族の衰弱に抵抗しているにすぎないのである。
（４）（p232）
・資本主義的生産は一定の周期的循環を経過する。それは、静止状態、活気の高揚、好況、過剰取引、恐慌、不況を通じて運動する。諸商品の市場価格及び市場利潤率は、これらの諸局面

に従って、時にはその平均を下回り、時にはその平均を上回る。
循環の全体を考察するなら、市場価格のある乖離が別の乖離によって相殺されており、この循環の平均をとれば､諸商品の市場価格がそれらの価値によって規制されている事が分かるだろう。
・市場価格が下落する局面、及び恐慌と不況の局面においては、労働者は、･･･間違いなくその賃金は下がるだろう。だが、このように市場価格が下落する時でさえ労働者は、騙されないようにする為には、どの程度の割合で賃下げが必要になるのかを巡って資本家と議論を闘わせなければならない。
・特別利潤が得られる好況の局面において、もし労働者が賃上げの為に闘わないとしたら、1つの産業循環の平均をとるなら、彼は、平均賃金さえ、即ち、自分の労働の価値さえ受け取らないことになるだろう。･･･一般に、あらゆる商品価値は、需要と供給の絶えざる変動から生じる市場価格の絶えざる変化が相殺されることで実現される。現在のシステムに基づく限り、労働は他のすべての商品と同じく 1 個の商品にすぎない。それ故、労働は、その価値に照応した平均価格で売れるためには、これと同じ変動を経なければならないのである。
・奴隷は永続的で固定的な分量の生活資料を受け取っているが、賃労働者はそうではない。
賃労働者は、ある場合に生じた賃金下落を埋め合わせる為だけでも、別の場合に賃上げを勝ち取ろうと努力しなければならない。もし、賃労働者が資本家の意志を、その命令を、唯々諾々と受け入れるならば、彼は、奴隷の安定性もなしに、奴隷と同じ悲惨さをことごとく被ることになろう。
（5）（p234）賃上げ闘争は、それ以前の種々の変化、即ち、生産量、労働の生産力、労働の価値、貨幣の価値、搾取労働の長さ又は強度における変化、そして需要供給の変動や産業循環の種々の段階に照応する市場価格の変動、こうしたものの必然的な結果であり、一言でいえば、先行する資本の行動に対する労働側の反作用なのである。これらすべての事情と無関係に賃上げ闘争を取り扱い、専ら賃金の変化だけを見て、それを引き起こした他のすべての変化を見逃すならば、諸君は誤った前提から出発して誤った結論に至ることになるだろう。